

## 「主イエス、埋葬される」

2016年01月16日

ルカによる福音書 23章 50節～56節。さて、ヨセフという議員がいたが、善良な正しい人で、同僚の決議や行動には同意しなかった。ユダヤ人の町アリマタヤの出身で、神の国を待ち望んでいたのである。この人がピラトのところに行き、イエスの遺体を渡してくれるようにと願い出て、遺体を十字架から降ろして亜麻布で包み、まだだれも葬られたことのない、岩に掘った墓の中に納めた。その日は準備の日であり、安息日が始まろうとしていた。イエスと一緒にガリラヤから来た婦人たちは、ヨセフの後について行き、墓と、イエスの遺体が納められている有様とを見届け、家に帰って、香料と香油を準備した。

主イエスは十字架の上で苦しみの末、息を引き取られた。マルコ福音書は、朝の9時に十字架につけられ、午後3時に亡くなられたと伝えている。十字架刑は数日間、苦しみ抜いて、ようやく死に至る。主イエスは6時間という考えられないほどの短い時間で亡くなられた。受難週の緊迫した論争、最高法院での徹夜の裁判と激しい暴力、そして、十字架を背負う過度の労苦で体力を消耗し、短時間で命を落としたのである。

この時、アリマタヤ出身のヨセフという人が現われた。彼は最高法院の議員で、神の国を待ち望む信仰深い人であった。前夜行われた最高法院での同僚議員たちの行動と決議に同意できなかった。あまりに無法なやり方に腹を立てていたのである。しかし、怒涛のような、主イエスを殺そうとする裁判の勢いに異議を申し立て、反対することができなかった。マタイ福音書 27章 57節 bに「この人もイエスの弟子であった」と記している。どのような弟子であったかは分からないが、主イエスを深く尊敬していたことは間違いないだろう。不当な扱いを受けた主イエスに申し訳ない思いで一杯であった。

彼は、総督ピラトに遺体の引き渡しを願い出た。十字架刑を受けた者は刑場に放置され、肉は野犬に食われ、野鳥についばまれるのが通常であった。遺体を引き取れば、主イエスの仲間と見なされ、不利な立場に立たせられる。ヨセフは、それを承知で、勇気を持って願い出た。主イエスに対する敬意と最高法院への憤りが、この行動に駆り立てたのである。十字架から降ろし、亜麻布でくるみ、誰も葬られたことのない、岩に掘ったヨセフ家の墓に納めた。ヨハネ福音書 19章 39節に「そこへ、かつてある夜、イエスのもとに来たことのあるニコデモも、没薬と沈香を混ぜた物を百リトラばかり持って来た。彼らはイエスの遺体を受け取り、ユダヤ人の埋葬の習慣に従い、香料を添えて亜麻布で包んだ」と、二人で埋葬したと伝えている。3時間後には、何の労働もしてはならない安息日になるので、急いで、埋葬をしたらう。

ヨセフ家の岩に掘った墓地への埋葬が復活を可能にしたと言える。当時、貧しい人々は土葬にされた。また、刑場で野犬や野鳥に食われ白骨になれば、復活の出来事に結び付かないからである。ヨセフの行動は大きな意味を持ったのである。

主イエスと一緒にガリラヤから来た婦人たちは、ヨセフの後について行き、墓の場所と、主イエスの遺体が納められた状況を見届けた。急いで埋葬したので、十分な香料と香油が塗られてないことを知った。彼女たちは主イエスを失った悲しみ、主イエスを慕う篤い思いで、もう一度丁寧な埋葬をしたいと、家に帰って、香料と香油を買い求めた。神は、彼女たちに復活した主イエスと最初に出会う栄誉を与えてくださった。男の弟子たちは事態を恐れ、困惑し、隠れるだけであった。